広島大学附属三原学校園研究紀要　第２集　2012　pp. 15-20

保　育

問題を自ら解決していこうとする力を育む保育とは

—友だちと目的をもって遊びをすすめていく５歳児の姿から—

君　岡　智　央

１，はじめに

近年の幼児期の子どもたちの育ちの変化に対応し，平成20年に幼稚園教育要領が改訂された。その幼稚園教育要領の中にある領域「環境」の内容の取り扱いの一部には，「他の幼児の考えなどに触れ，新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい，自ら考えようとする気持ちが育つようにすること」[1)]が新たに示されている。また，領域「人間関係」の内容の取り扱いの一部には，「他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わえるようにすること」[2)]が新たに示されている。５歳児になると領域「環境」，領域「人間関係」の内容の取り扱いに新たに示されたような育ちや様子が徐々に見られるようになり，友だちと遊ぶ中で課題意識をもちながら，共通の目的に向かって取り組もうとする姿も見られるようになってくる。この時，友だちと力を合わせながら取り組んではいても，思い描いた通りにならなかったり思いも寄らないような出来事に出会ったりするなどの様々な問題にぶつかることが当然のように起こる。ここで教師の誰もが子どもたちに，問題の解決に向けてあきらめることなく取り組んで欲しい。問題を解決し，目的を実現する喜びを味わって欲しいと願うはずである。子どもたちが遊びの目的を実現させていくには，目的を実現させたいという強い思いをもつとともに，これまでに経験してきたことや知り得たことから自分で考えたことを友だちと伝え合い，試行錯誤を重ねていくことが必要である。しかし，実際に子どもたちの様子を見ていくと，友だちと目的をもって遊ぶ中で問題とぶつかった時，難しいと感じたりうまくいかなかったりすると解決することをあきらめ，考えてみること，いろいろな方法を試してみることをしようとしない姿が見られる。そのため，目的が実現することなく遊びが終わってしまうという現状がある。こうした現状から，友だちと共通の目的をもって取り組む中で生じた問題を自ら解決していこうとする力を育んでいく必要があると考えた。そこで，今回のテーマを設定し，５歳児の遊びの様子に焦点を当てながら研究をすすめることにした。

２，研究の構想

(1) めざす子どもの姿

５歳児になると信頼し合う友だちと互いの考えやイメージを伝え合い，力を合わせながら遊びをすすめていく。そこには，友だちとの間で生まれた共通の目的がある。こうした目的に向かって取り組む中で生じた問題を解決し，実現できた時には，子どもたちにとって大きな自信へとつながるだろう。また，達成感や充実感を得ることもできるだろう。そう考えると遊びをすすめていく中で生じた問題に対し，子どもたち自らが解決に向けて友だちと試行錯誤を繰り返し，あきらめずに取り組んで欲しいのである。よって，以下のような子どもの姿を５歳児に設定して研究をすすめていくことにした。

友だちと共通の目的をもって遊びをすすめていく中で生じた問題に対して，自ら考えたことを伝え合っていきながら解決に向けて試行錯誤を繰り返しあきらめずに取り組んでいく子ども

(2) 手立てについて

設定しためざす子どもの姿を受けて，以下のような手立てを考えて実践していくことにした。

・遊びの中で問題が生じた時，子どもたちだけで解決しようとしていれば，その様子を見守る。
・問題を解決していくことにあきらめる様子が見られた時，教師が子どもたちにどうすれば良いのかを問いかけて一緒に考えていくようにする。
・問題にじっくりと向き合える環境構成と解決に向け自分たちのペースで取り組める時間をもてるようにする。
・解決に向かって繰り返し取り組んだことに満足感や充実感がもてる言葉をかけるようにする。
・子どもたちの挑戦心をかき立てることができる環境を構成する。
・遊びの中で生じる問題に応じ，解決に向けて子どもたちがいろいろと考えたり試したりしていける素材を準備して環境の再構成を図るようにする。

３，実践例（５歳児）

実践例１「アゲハの幼虫を育ててみよう」「花の蜜を吸わせてあげんといけん！」（６月）

保育室で子どもたちと一ヶ月にわたって飼育をしてきたアゲハチョウの幼虫が成虫になり，Ａ女とＢ女が愛おしそうに観ている。Ａ女が「おなかすいてないかなぁ？」とつぶやく。隣で一緒に観ていた教師が「チョウチョウって何を食べているのかな？」と聞いてみる。Ａ女は「花よ。花の蜜を吸っているんよ。花の蜜を吸わせてあげんといけん！」と思い立ったように声を上げる。Ａ女の思いにＢ女も賛同する。これに対し教師は「それはチョウチョウも喜ぶよね。だけど，部屋の中に今は花がないね。」と困ったように話す。Ａ女とＢ女は“困ったな　どうしよう”といった表情で辺りを見回す。するとＡ女が，「外の花を持ってきたら？」と提案する。Ｂ女が「いいじゃん。そうしよう！」と賛同し，二人でサルビアの花が植えてあるプランターを保育室に運んでくる。しかし，アゲハチョウはサルビアの花に向かって来ることはなく，二人はどうしたらよいか考えている。

しばらくしてＡ女とＢ女に教師が，「どう？花に来た？」と聞いてみる。二人は，「全然来んよ」と首を振り，半ば，あきらめかけている。教師は，「そっかぁ。蜜を吸わせてあげたいよね。どうやったら来るかなぁ？」と二人に問いかけながら一緒に考えてみる。すると二人は再度考え始めた。Ｂ女が「手でそっと羽根を持ってみたら？」と話す。しかし，Ａ女が「羽根を触るとチョウチョウが，天敵が来たって思うからやめよう」と言う。続けてＡ女が「箱に乗せてみよう」と話す。その方法を試してみるが，なかなかうまくいかなかった。次にＢ女が「棒に乗せたら？」と話す。するとＡ女が「木の棒じゃ！」と言い，二人で裏庭に行って枝を持って来る。Ａ女が小声で「そっとよ，そっと」と言いながら，枝をアゲハチョウの足の近くに置くようにアドバイスする。Ｂ女が枝をそっとアゲハチョウの足の近くに置く。すると足が枝に乗ったので，そのままサルビアの花びらの上にそっと乗せる。Ａ女とＢ女は「大成功！」と喜ぶ。Ａ女とＢ女を始め，周りの子どもたちがプランターを囲みながら続けて観察を行う。

【考察】

成虫になったアゲハチョウに蜜を吸わせたいという目的の下，身の周りに花がない，アゲハチョウが花にやってこないという二つの問題が生じた。子どもたちが目的を実現させたいという願いをもったならば，実現に向けて問題を解決する過程を大事にしたかかわりをしていきたいと考えた。そのためには，教師が問題解決への手がかりをすぐに与えるのではなく，まずは，子どもたちだけで解決していこうとする様子を見守り，あきらめかけた時に子どもたちにどうしたらよいかを問いかけて，一緒に考えていくかかわりが大事になってくるのではないだろうか。その結果，Ａ女，Ｂ女が徐々に考えを広げていき，考えたことを出し合っていくことやＡ女とＢ女の共通の目的の実現につながったと考えている。このように子どもに

どうしたらよいかを問いかけたり，一緒に考えたりするかかわりが，問題を自ら解決していくうえで必要であり，そして広がった考えを友だちと出し合う経験は，問題を自ら解決していく力を育むうえでかかせないのではないのだろうか。

実践例２「プラタナスの葉を見つけたよ」

「あれ？枯れてる！何で？」（９月）

飼育小屋の近くにプラタナスの木がある。Ｃ男，Ｄ男と遊んでいたＥ男が，巨大なプラタナスの木の葉が落ちていたのを発見する。その葉を教師に嬉しそうに見せに来る。Ｆ男が葉に穴が開いているのを見て「これは虫に食べられた跡だよ」と話す。今度はＥ男が，「この葉っぱ，少し折れているところがあるんだよ」と話す。Ｇ女が「（葉の柄を）水に入れて育ててみたらいいかも」と話す。どうやら，葉の柄が水分や養分を吸収する茎と同じ働きをすると思ったのだろう。それで，“葉も柄から水分を吸収して生長していくのでは”という発想につながったようである。Ｇ女の提案に対し，教師が「どうなるのかなぁ？」と聞いてみる。Ｇ女は「穴が直るかもしれないし，折れたところが直るかもしれないよ」と答える。Ｇ女の話を聞きながらＨ女は，「水に入れて育てたら根っこが生えてくるかもしれないよ」と話す。Ｉ男は，「葉っぱが大きくなるかもしれん」と話す。Ｅ男は，「へぇ，おもしろそう」と答える。そしてＥ男を中心に子どもたちが，満杯に水が入ったペットボトルを用意し，葉の柄を口に差しておくとどうなるか試し始めた。

翌朝，残念なことに葉が枯れ始めた。葉は登園した時にすぐに気づくように，あえて子どもたちがよく通る場所に置いておいた。子どもたちが登園してくると葉の様子にすぐに気づき，「あれ？枯れてる！何で？」と疑問の声を挙げる。教師が「えっ？せっかくすごい葉っぱを見つけたのに枯れているの？」と子どもたちに聞く。枯れ始めた葉を見ながらＥ男が「（ペットボトルの）水が多いからかな？」と話す。すると，Ｇ女が「水が多いと腐るんだよ」と話す。Ｇ女の話から，Ｅ男がペットボトルの水の量を半分にしてしばらく葉を置いておくことにした。その後もＥ男を中心に周りの子どもたちが葉を気にかけていたので，教師は葉を保育室内にそのまま置いておき，この問題にじっくりと取り組めるようにした。

翌日，また葉を見てみるとますます枯れていっていた。その様子を見たＪ女は，「葉っぱは暑いところでよく育つよ。外に出したらいいんじゃないかな？」と話す。Ｅ男が「そうか！」と答えると「裏庭の陽があたるところに持っていこう！」とＪ女に伝える。Ｊ女とＥ男が一緒に裏庭の廊下に葉を置いておくが，やはり葉は復活しなかった。Ｃ男が蛍光灯の灯りの下に葉を置いてみることを考えたので一緒に試してみたり，Ｅ男が再度水の量を増やしてみたりしたが，さすがに葉は復活しなかった。葉が復活しなかったことに対し，Ｅ男は残念そうにしていた。教師は，枯れた葉を復活させようと試行錯誤したＥ男たちの様子をクラスで紹介し，認めていった。この時，Ｅ男の顔を見ると満足そうな表情であった。

図１　Ｅ男が見つけたプラタナスの巨大な葉

【考察】

プラタナスの木の葉を水に入れて育てたらどうなるかを知りたいという目的がある中で，葉が枯れ始めるという子どもたちにとっては思いも寄らない問題が生じた。Ｅ男を中心に子どもたちが枯れ始めた葉を復活させようと粘り強くいろいろな方法を試していく姿から，なんとか復活させたい

という強い思いが感じられる。枯れかけた葉を復活させることは，実際には解決不可能に近い問題であるが，復活させたいという思いが子どもたちにある限り，その思いを教師が受け止め，応えていく必要があると考える。そのためには，枯れかけた葉でも子どもたちが問題にじっくりと向き合えるよう，そのまま部屋に置いておくとともに，自分たちのペースで納得いくまで考えたり試したりしていける時間をもてるようにしていくことが大事になってくると考える。そのようにしたことで，二日間に渡って子どもたちなりに解決に向けて考えること，試すことを繰り返していったのではないだろうか。

また，Ｅ男の満足そうな表情から感じ取れたことがある。それは，解決しなかった場合でも子どもたちなりに試行錯誤する姿が見られたならば，その姿をしっかりと認めていくということである。今後，遊びの中で問題が生じた場合，解決していくための原動力や自信へとつなげていくために，も大事な援助となると考える。

この実践で子どもたちは，枯れた理由を探ることよりも葉の復活に向け，知っていることや経験したことを生かしながらいろいろな方法を試していき，やり尽くしている。最後は葉が復活することなく残念な結果であったが，実践での子どもたちの姿から，問題を必ず解決させて答えを出させていくことよりも，問題の解決に向け粘り強く考えたり試したりしていく過程を大切にする必要があると考える。こうした過程の中で子どもたちに気づいたことがあれば，その気づきが新たに他の問題が生じた時の解決に生かしていけると考える。

実践例３「高く高く積み上げてみよう！」
「キリンの看板を超すぞ！」（10 月）

この遊びは子どもたちにとって身近な素材であるペットボトル，紙コップ，段ボール，ヨーグルトカップなどを用いてどこまで高く積むことができるかを友だちと共に挑戦していくものである。

子どもたちがダンボールを高く積み上げて遊んでいた。これまでは自分の背丈を少し超えるくらいを目的に段ボールなどを高く積み上げていたが，その目的は簡単に達成したため，子どもたちは満足しきっていた。そこで，教師が高さ約 190 センチのキリンの看板を保育室に設置した。すると，子どもたちがキリンの看板の高さに驚き，その高さを越すまで積むことを目的に取り組み始めた。

子どもたちが積んだ段ボールが，自分たちの背丈を超えるとテーブルに上がって積み上げる。しかし，テーブルに上がっても自分たちの背丈を超える高さになるとそれ以上は積み上げられなかったり，積もうとすると段ボールがすぐに崩れたりする。こうした問題を子どもたちは，なんとかしたいと思っていた。Ｋ男もその一人で，「背が届かないから，もう（段ボールを）乗せられないよ」と悔しそうにつぶやいている。Ｌ男が「僕とＫ男君で手をこうやって(組んで)誰かがその上に乗って積んだらどう？」と騎馬戦をする時に人を乗せる方法を嬉しそうに提案する。隣にいたＭ女が「危ないよ」と止める。今度はＫ男が「それなら段ボールを何個も積み重ねて，その上に人が乗って積んだら？」と提案する。Ｌ男が「いいねぇ！硬いダンボールがいいよ。これとか」と言いながら硬そうな段ボールを見つける。Ｍ女も「これとかは？」と言いながら硬そうな段ボールを持ってくる。Ｋ男が「その段ボール，いいねぇ」と言って机を移動させ，自信たっぷりと段ボールに乗ってみる。しかし，つぶれてしまい，みんな困った表情になる。Ｌ男「そうだ！一番上の長細いダンボールを横にして，また長細いダンボールを縦にして乗せたらいいんだよ！」と考える。縦にして積まれていた一番上の長細い段ボールを一旦，横にしたら積みやすくなるのではないかとＬ男が提案する。しかし，そうして乗せようとすると上の方の段ボールが落ちてしまう。今度はＫ男が「わかった！段ボールを最初から乗せてやったら（積んだら）いいんだ」と提案する。「いいねぇ，よし，いけ～　Ｋ男君！」とＬ男に応援されながら，Ｋ男が机に上がって段ボールを２個一緒に積んでみようとするが，それでも崩れてしまう。その様子を見ていたＮ男がやってきて，「そんなんじゃ，だめ

だって！」と大声で言う。K男は「じゃぁ，どうやるの？」とN男に対し，少し怒った口調で言う。N男は崩れた段ボールを拾い，積み始めの段ボールのいくつかを横にして積み，しっかりと安定させてから細長い段ボールを縦にして積み始めた。しかし，自分の背では届きそうにないところを積もうとするとやはり崩れてしまう。K男が「やっぱり，だめだね」と言うとK男とN男の間で積み方を巡っていざこざが起こる。子どもたちもどうしてよいかわからず困っているようではあったが，“なんとかしたい”という思いは失ってなかったようであった。ここで教師が「みんないっぱい考えたんだよね。N君もなんとかしたいと思ったんだよね。今までやってみた中で，どれが一番うまくいきそうだった？」とアドバイスする。すると子どもたちは，再度考えてもう一度積み始める。そして，積んだ段ボールが自分たちの背丈を超えると，机に上がって段ボールを２つずつ慎重に積んでみた。そして，今までにないくらい高く積んだ時，子どもたちから教師に「先生，測って！」と声がかかる。教師が紙テープで子どもたちが積んだ段ボールの高さを測り，キリンの看板と高さを比べてみる。結果，キリンの看板を超えるには僅か数センチ届かなかった。子どもたちは悔しそうにしていたが，自分たちの中でこれまでにないくらい高く積み上げられたことに充実感を感じているようであった。

図２　目的に向かって段ボールを積む様子

【考察】

今回，子どもたちよりも背が高いキリンの看板をあえて設置し，段ボールを高く積んで遊ぶうえでの目的となるようにしたことで，子どもたちの“やってやる”という挑戦心や困難を“乗り越えたい”という意欲をかき立てることができた。その結果，遊びの中で生じた問題に対して子どもたちが目をそらすことなく，しっかりと向き合っていくことにつながり，目的の実現に向けて友だち同士で知恵を振り絞り，考えたことをねばり強く試していく姿につながったと考えている。問題を解決していくために，意欲的に“いろいろとやってみよう”という姿勢を育むには，子どもたちの中にある挑戦心をかき立てることができるような環境をつくっていくことも必要となってくると考える。

これまで，高く積み上げていく遊びにおいては素材の大きさや形は比較的同じものを用意してきた。だが，今回の実践においては，段ボールが高くなっていくにつれて積み方に工夫がなければキリンの看板を超すことは難しいと考えていた。そのため，子どもたちが段ボールの積み方についていろいろと考えたり試したりしていけるよう，様々な形や大きさ，硬さのものを用意し環境の再構成を行った。そうしてみたことで，子どもたちが段ボールのいろいろな形や硬さから自分なりに考えたことを友だちに伝えていく様子が見られた。このことから，用意した素材から問題解決に向けて子どもたちの中で様々な考えを生んだり，いろいろと試していくきっかけとなったりすることがわかる。

４，実践を終えて

問題を自ら解決していこうとする力を育む保育がどうあるべきか，実践するにあたって考えた手立てを講じていく中で次の４つのことがわかった。

・教師から直接与えられた問題を解決していくのではなく，子どもたちが自発的な遊びをしている中で自らが問題を発見し，解決したいと思え

ることが大切である。

・子どもたちがどんな目的をもって遊んでいるのか，その中で何を問題としてとらえているかを教師がしっかりと把握してかかわったり，環境構成を行ったりすることが大切である。
・問題解決に向けて取り組む子どもたち一人ひとりの考えを広げていけるような教師のかかわりや環境構成を行うことが大切である。
・問題を解決させて答えを出させることが重要なのではなく，解決に向けて子どもたちが試行錯誤している姿が大事なのであり，そのための教師のかかわり方を考えていくことが大切である。

５，おわりに

今回，“問題を自ら解決していこうとする力を育む”という視点で実践を行う中で，子どもたちから解決に向けて取り組むひたむきさや粘り強さ，根気強さが伝わってきた。このことから物事に取り組むひたむきさや粘り強さ，根気強さを幼児期の子どもの頃から身につけておくことが大事であることがわかった。

今回の実践を通じてわかったことを念頭におき，今後も友だちとともに目的をもって遊びをすすめていく姿を大事にしていきながら，問題を自ら解決していこうとする力を育む保育を実践していきたい。

＜引用文献＞

1)　「幼稚園教育要領解説」，p. 5，2008，フレーベル館.
2)　前掲書 1)，p. 5.